九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

藤村禅著『楠本碩水伝』

疋田, 啓佑
都城工業高等専門学校

https://doi.org/10.15017/18059

出版情報：中国哲学論集. 5, pp.73-78, 1979-10-01. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

書評

藤村　禪　著「楠本碩水伝」

疋田啓佑

本書は幕末平戸藩の儒者楠本碩水の伝記である。著者は「幕末から明治初期にかけて、その名天下に洽く、遠く青森、新潟、水戸からも笈を負ふて、この僻陬の地、針尾島に来り学ぶ者が多かったということは、今日では郷土の一部の人以外には殆んど忘れ去られている。そしてその伝記も学問内容も、またその業績も明らかにされないまゝ今日に至っているのを、郷土の後輩として、このことを遺憾とし、この偉大な郷土の先輩の業績を明らかにして後世に伝えるのは、後輩の果さねばならない責務である」（前がき）という目的で執筆された。碩水の兄楠本端山に関しては、岡田武彦先生の「楠本端山」（昭和34年、積文館刊）に、端山の伝記と学問、そして近世儒学史上の位置づけが成されているが、碩水に関しては端山と並称されるだけで、碩水に焦点をあわせた研究はないのである。強いて挙げるなら、高瀬代次郎の「佐藤一斎とその門人」（大正11年南陽堂刊）の門人の中に数頁顔をのぞかせる程度で、日本思想史や儒学史にも忘れられた存在となっている。※1その理由は、明治以来の文明開化・欧化主義の風潮に合わなかったこと、そればかりでなく彼ら幕末維新の朱王学者が、中国、明末の思想家の影響を受けており、彼ら明末の思想家の学問は、朱子学を通過した上で陽明学に入り、その陽明学の欠陥を超克した中から生れた。実践的心的性格を持ったため非常に究めがたいものであったからとも考えられる。それはさておき、ここにこのような「楠本碩水伝」が完成したことを喜びたい。

本書は、碩水の一生を十九章に分け、年代順に項目を立てて叙述している。概略を述べると、

一、家系と生ひ立ち　楠木家は河内の楠木氏の後裔とされ、江戸の元禄頃から家系が明らかにされている。肥前国針尾村に住して農業を営む中に庄屋を務め、祖父丈助が士分にとりたてられる。碩水は父忠次右衛門の第三子として

生れた。幼名謙三郎、名は孚嘉、字は吉甫。号は碩水、又天逸とも言った。兄に確蔵（号端山）と慶四郎（節斎）、そして弟に猪吉（号松陽）、もう一人の弟は夭折した。幼い頃は近藤新右衛門に四書を習う。維新館教授佐々鵲堂（佐藤一斎の門人）の養子となった。しかし、後年復姓している。

二、遊学㈠　端山が九州内の儒者を巡ったのにならって、佐賀の草場珮川、熊本の木下韡村、日田の広瀬淡窓などを訪れている。

三、遊学㈡　再度熊本へ行き、木下韡村、横井小楠、月田蒙斎らを訪れ学を受けた。月田蒙斎は碩水に最も大きい感化を与えた崎門派の儒者である。

四、遊学㈢　江戸に出て佐藤一斎の門に入り、また一斎の高弟大橋訥庵の門にも入るが、そこで学ぶよりも、同門の人々との交友により切磋し、また江戸への往復の途中で精力的に各地の儒者、東沢瀉、吉村秋陽、池田草庵、春日潜庵らを訪問、貪欲に学ぶべきものを吸収した。碩水は師の大橋訥庵をあまり好ましく思っていなかった。というのは訥庵の政治的運動、就中頼三樹三郎の遺髪を収葬したことを売名行為と解釈し、また春日潜庵が王事に奔走したことも功利的と評して嫌った。訥庵は端山との関係もあって、碩水を諄諄と諭しているが、碩水は後年になるまで訥庵の真意は理解できなかった。碩水は師を見出すべく、学問の本質を蒙斎に問うている。そして江戸遊学の帰途、大阪の尼崎修斎から三宅尚斎の講義や直方の書を進呈され、崎門学に入ることになった。碩水が崎門学を自分の学とするようになったのは、尼崎修斎のお蔭だと言っている。また崎門の儒者金子霜山をも訪うている。

五、端山への影響　碩水は平戸に帰り、維新館の教授見習となり、そこで崎門学を唱えた。兄の端山は明末の儒者高攀竜の学を修め、崎門には疑問を持っていたが、碩水から影響されて崎門に共鳴するようになる。

六、名分論　豊前小倉藩の後嗣に小笠原敬斎が候補とされたのに、敬斎は固辞して木曽山中に逃げた事件があった。これにつき端山や吉村秋陽は、敬斎の功利に走らぬ身の処し方に対し賞賛したが、それに対し碩水は名分による出処進退の方から評価している。これは崎門学でも、浅見絅斎や若林強斎らの、君主は天皇一人、将軍大名も庶民と同じく一つという考えを、碩水や敬斎は受け継ぎ、「二君に仕えず」という出処進退の在り方を持したからである。ただ碩水は諸般の事情から平戸藩に仕えているものの、本質的には大名に仕えるのを潔しとしない思想であった。

七、月田蒙斎との交渉　蒙斎は崎門の道統を継ぐ者として小笠原敬斎を考えていたが、敬斎が急死したため、端山、碩水兄弟に托すことにして、千手廉斎から受けた遺書を二人に贈り、斯道後継者たらんことを依頼した。崎門の道統は次のようになるわけである。

山崎闇斎→三宅尚斎→久米訂斎→宇井黙斎→千手廉斎→千手旭山→月田蒙斎→楠本端山・碩水

八、桜谿書院　端山碩水兄弟は自分らの理想の学問（正学）を興す必要で桜谿書院を建て、崎門流の学問を講義し指導した。

九、小倉・佐賀への旅行　十、三条公への上書　十一、上京　以上三章をまとめて述べる。藩命により日本の国内の状況を調べるため旅行に出る。また福岡藩の尊王派と俗論派の党争を調停しに行き、旧友土方久元と会い、その関係で三条実美公に謁す。また幕府と長州の戦雲急であり、急変の日本の状況にどう対処するか、諸国の情勢の調査をする。王事のために尽すか、幕府につくか、端山はその面で下問を受けるが、碩水は重要な関係はしていない。このあたりの歴史情勢は、歴史家としての著者の力量が存分に発揮され詳細を極めている。

十二、王政復古　平戸藩はこの歴史的転換に立ち後れをする。引き続き成された版籍奉還について端山は、封建制度を改めるこのやり方について行けず、このことを不可として説くが、碩水は反対に版籍奉還し郡県制を主張していた。これは当時の儒者には珍らしい時流を抜いた卓説であると著者は碩水を大いに評価している。そして碩水は名分論で説いているように、天皇の下に仕える立場であった（崎門尊王説）ので、藩公から家禄を賜わったのを辞退、藩公の心証を害し、世間の非難をあびたが、これこそ彼の思想の実践である。

十三、隠棲　碩水の理想とする時代が到来したが、先を見こして隠棲、この理由につき著者は「碩水伝」の中の「然れども道の行はれざる、先生早く已にこれを知る」という語から推測し、功利的世界の出現が、道の世界からはなれていくことを予測してのこととする。その傍証として池田草庵の書簡の中に同様の考えを見出している。碩水は隠棲して梅林山荘で子弟を教育、明治七年から十年にかけて世俗と一切遮断した生活をしている。

十四、鳳鳴書院　端山、碩水兄弟は平戸から針尾に帰り、ここに門弟の協力を得て鳳鳴書院を建てる。そこに学んだ門人菅沼貞風、岡彪邨（直養・次郎）、貞方士精（弥三郎・研）などの事績、鳳鳴書院の教育上の功績を述べてい

る。

十五、並木栗水との論争　訥庵門の並木栗水が理気及び性論について、程明道の思想を汲み入れて朱子の立場を固守する碩水と論争した。この論争に伴ない崎門の神道、陳北溪についても論争したが、後者は碩水説きふせられ、そのついでに碩水からすすめられて栗水が師の「大橋訥庵伝」を書くようになった。

十六、身辺雑事　友人達も次々と死に碩水も晩年を迎え、課題であった「日本道学淵源録」の校正増補を思い立った。

十七、内田周平との交わり　当時第五高等学校の教師だった内田周平が碩水を何度も訪れ、碩水から教えを受けるとともに、碩水も周平から受けるものが多く、崎門学の振興に努力する周平に期待をかけた。周平は孝養のため熊本を離れ、後東京大学に奉職、碩水の晩年の精神生活を充実させた。

十八、晩年　門弟が八十を賀して図書室を建てて碩水に贈る。それに守待（守先待後）室と名づけた。

十九、碩水遺著の出版と岡彪郁　碩水の死を契機に、弟子が協力して遺著を出版、特に岡直養の自己を犠牲にしての熱意が遺書の全出版を完成させた。

全篇、歴史家である著者の資料を駆使した詳細な碩水の伝記である。すでに岡直養によって刊行された「碩水先生餘稿」「朱王合編」「碩水日記」「過庭餘聞」や「幕末維新朱子学者書簡集」（「朱子学大系」所収）は勿論のこと楠本家所蔵の未刊の書簡や弟子貞方弥三郎の貞方家所蔵書簡など、一般に未公開の資料をも披露して説かれている点は、碩水の伝記として他の追随を許さぬものになると思う。

本書中特に注目すべきものは碩水の交友関係である。朱子学者の栗水は当然であるが、池田草庵、春日潜庵、吉村秋陽、東沢瀉らの陽明学者との深い交りである。彼の奉ずる朱子学に相対するに拘わらず、特に草庵や沢瀉との書信の往復は死ぬまで続く親密さである。碩水は、学問の異同得失は互に問はず、その信ずる所を尊重して交わりを続けた。この生き方は相手の立場を認める大きい人間的立場に立っているのである。

次に学問への真摯な熊度と師弟愛の深さである。晩年内田周平（号、遠湖）が五高を辞職した後も、碩水に文章の添削や書物の批評を依頼している。当時碩水は眼疾のため読書にも不自由を覚えているのにも拘らず、それらに一つ

一つ丁寧に応じている。それだけでなく碩水から周平にも学問上の問題の調査を依頼している。その中で碩水が常に問題にしているのは学者の出処進退のことであった。碩水にとっては、いかに該博な知識の所有者でも、出処進退に欠けるものがあるのは真の学者として認めがたい。そこに学問と人間の生き方の結びつきが見られるのである。

岡彪邨（次郎・直養）・貞方士精（弥三郎・研）との師弟愛も美しい。特に岡彪邨が恩師の遺志を継ぐのに全生涯を賭け、そこに立命の境地を見出す魂の美しさ、さわやかさは胸を打つ。師の全遺著を出版し、師の業績を永く世に伝えるとともに、日本の道義の回復を願った。そして「先生畢生貧に安んず。弟子その書を公にせんと欲して富人の門を叩かば、則ち先生必ずこれを喜こばざらん。直養因って衣を縮め、食を節して、わずかに以てこれを成し、且く以てその罪万一を償はんと欲す」（P335）と述べているように、自分の全財産を投じ、自分の生活を切りつめて師の遺著の出版に力を注ぐ姿は感動的で、現代の若い人々に読んでほしい姿である。

最後に本書について望む点を二、三挙げてみたい。内容の詳細さと深さからすれば、幕末の儒者を研究した専門的書物である。その点から考えると碩水の思想については些か不満を感じるのである。それは碩水の思想を形成する根抵にある朱子学は、崎門学派のそれであり、崎門学においては朱子から直接というよりも、朝鮮の儒学者李退渓を※2通しての朱子学であることはすでに研究されている。そして碩水においても※3それは言えるのである。それなら碩水における李退渓、崎門を通過した朱子学とはいかなるものであったかという。その面の追求がなされていない。並木栗水との理気論や名分論だけでは、碩水の思想としては不十分と言えよう。また名分論は、碩水の場合は浅見絅斎や若林強斎の考えを受けついでいるのであるが、月田蒙斎からつながる崎門の道統は三宅尚斎の流れになっている。とすると崎門の考えを碩水はどう把えているのか、更に付け加えると碩水は明末の陽明学者※4湯潛庵の学を好んだと（「東沢瀉の書簡」）ある。それはどういう思想的意味を持つのか等。しかし碩水の伝記を中心とするこの書にそこまで求めるのは酷なのかもしれない。

本書の形態的面から二、三述べると、文献表の整備や書簡のうち未公開のものの所在や参考文献からの引用の注記なども欲しいところである。またこの書を現代の読者層に普及させ、碩水先生の遺業を広く知らしめようとするなら現代仮名遣いと当用漢字の使用を望みたい。また漢文なども返り点がついているのとつかないのと不揃いのがあるよ

りは、いっそ書き下し文か現代訳にしてほしいところである。本文の平易さに比べて、引用文は相当難解である。このような点を挙げたからとてこの書の価値には何ら影響はないと思う。

碩水先生は「これと言って顕著な功績も残されなかった。言わば平凡な田舎学者の一生であったかに思われる。しかしながら内面の世界に立ち入ってみるならば、外面的な生活の平凡さからは、凡そ想像もできない精神のたゆむことなき苦闘の連続があり、そして遂に人間精神の到り得る最高の境地まで極めた学者でなかったかと思われる。学者をその社会的地位や世間的名声で以て評価すること程馬鹿げた滑稽はない」（P324）とい言う。しかし現代社会はその馬鹿げた評価をしている面もある。そういう面からも現代の、これから日本を築く若者達に読まれるべき、また読んでほしい本である。「崎門朱子学の本領は己れのための学を以て学問の本質とした」のだが、その考えを実践篤行したのが楠本碩水である。この人の人となりと実践の記録である本書は、現代の軽佻浮薄な時代にずしりと重みをもたらすものである。

※1　事典類には「近世漢学者著作伝記大事典」（関儀一郎・関義直編）「漢学者伝記及著述集覧」（小川貫道編）「漢学者伝記集成」（竹林貫一編）など、また西村天囚の「九州巡礼」（大阪朝日新聞）にも言及されている。新らしくは笠井助治著「近世藩校における学統学派の研究」（吉川弘文館）P1668これが引用するものは「長崎県人物伝」（未見）

※2　阿部吉雄著「日本朱子学と朝鮮」（東大出版会）全般的にわたって。

※3　同右書P374「碩水先生遺書」・P465－466「碩水先生餘稿」を引用。

岡田武彦著「楠本端山」（積文館書店）P89

※4　同右書P93

A5版　340頁　昭和53年10月25日発行　二五〇〇円
発　行　芸文堂（佐世保市本島町一－七）